岸曙光著

特 232
813

始

特232
813

東京の屋根の下

山岸曙光歌謠集

序

小著を題して「東京の屋根の下」とした。

こゝに収録した歌謠は僅少であるが最近に於ける東京生活中に書き溜めた二百篇近くの中より順序なく採つたものであるから雜記帳の一部として見ていたゞけば幸甚である。

土を基調とする民謠には別個の意義がある如く大衆を對象とする歌謠には特殊な使命がある。近時民謠と歌謠とを混同して論議する向きがあるけれどもそれは一種の誤謬である

歌謠は飽くまで花唄であつていい。然し詩心の喪失した歌謠作家の横行は實に戰慄すべきことだ。

尙、題字に友情を示してくれた藤澤大手君に謝意を表したい。

昭和十年一月十八日

山岸曙光

東京の屋根の下　目次

東京の屋根の下……八
南風……一〇
踊りぬきましよ……一二
ペーブメントの唄……一四
與太者の唄……一六
男の癖に……一八
文士と作曲家……二〇
占ひ……二二
呼べばとて……二四

卒業する日……二六
悲しき歌時計……二八
秋の砂丘……三〇
子守唄……三二
日かげの花……三四
あいつは獣……三六
夢の銀座……三八
水藻の花……四〇
惜春譜……四二
街の夜霧……四四
片戀……四六
母を憶ふ歌……四八
北極の唄……五〇
街の戀……五二
懐しの卒業日……五四
銀のピッケル……五六
マドロス行進曲……五八
戀のジャンプ臺……六〇
星のあかりに……六二

東京の屋根の下

東京の屋根の下

霧の朝も雪の夜も
街の時計臺を見て暮らす
こゝは東京の屋根の下
ボクと彼女の巣なんだよ
どうにもかうにも嬉しくて
口笛鳴らしてゐるんだよ

ボクが彼女の名を呼ぶと

鸚鵡も彼女の名を呼んで
こゝは東京の屋根の下
こても陽氣な巣なんだよ
どうにもかうにも嬉しくて
シャボンの玉を吹くんだよ

若い彼女がベビーちやんを
ボクに欲しいと駄々捏ねて
こゝは東京の屋根の下
こても朗らな巣なんだよ
どうにもかうにも嬉しくて
胸がどきゝ搏つんだよ

南風

南風吹き
葱の花咲いた

川の向ふは
大東京だ

肥料撒くのが
もう　嫌になつた

姉はショップガールの
幻見てる

妹ァ妹で
ダンサーの夢見てる

南風吹く
今日このごろを

セルの單衣が
あらばこ思ふた

踊りぬきましよ

街のあかりに
やさしく降るは
をとめごゝろの牡丹雪
　クリスマスゆえ　樹のかげで
　踊りぬきましよ　夜あけまで

雪の枯野に
橇走らせて

來るはいとしいあの人よ
　クリスマスゆえ　ほのかに酔ふて
　踊りぬきましよ　夜あけまで

星のきらめく
あの丘越えて
遠くかすかに鐘が鳴る
　クリスマスゆえ　頬笑みながら
　踊りぬきましよ　夜あけまで

ペーブメントの唄

ペーブメントに
柳の葉散り
街の燕が去きました

ペーブメントに
時雨がそゝぎ
赤いポストも濡れました

ペーブメントに
月かげ青く
雁が姿を描きました

遠く別れた
彼の人偲び
ペーブメントに立ちました

與太者の唄

俺らギャングだ　防彈チョッキよ
赤いネクタイ　無雜作にむすび
靴を鳴らして　口笛吹いて
　こても　女を焦らすのさ

俺らギャングだ　鳥打帽よ
凄い眼こやさしい靨
ちらこ見せては　口笛吹いて

　こても　女に乙なのさ

俺らギャングだ　醉っぱらってゐても
男伊達なら　拳銃一發
相手仆して　口笛吹いて
　こても　女がかはいのさ

俺らギャングだ　胸にバラつけて
熱い思ひで　踊つてゐるが
さつこ別れて　口笛吹いて
　こても　女を泣かすのさ

男の癖に

甘い涙の戀なんか
さらりと捨てて
ねえ ――
あなた
荊の道もゆきませう
暫し別れて暮らすのも
未來のためよ

ねえ ――
あなた
苦しいなんか言つちや厭
明日の苦勞も覺悟して
暮らして頂戴
ねえ ――
あなた
弱音を吐いちや駄目なのよ

文士と作曲家

隣の文士は平家蟹面して
朝から晩まで　晩から朝まで
氣持がむしやくちや　原稿が書けない
マダムはヒステリー　子供は癲癇
向ひ三軒は朝からラヂオだ
　葉鷄頭はまつ赤で眞夏は暑いナ
こちらの作曲家は裏なり瓢箪

朝から晩まで　晩から朝まで
ピアノをボン〳〵　作曲すら〳〵
ス井ートホームで　キッスの夕立
向ひ三軒のラヂオも現つだ
　コスモス搖らいで眞夏も涼しい
平家蟹文士はアンテナ叩いて
今日も作曲家に　がん〳〵怒鳴つた
こちらの作曲家は　屹驚仰天
マダムを抱へて　がつがつ顫ひだ
向ひ三軒のラヂオも止つた
　天氣豫報は嵐の嵐だ

占　ひ

りんごの皮を
剝きながら
うらなひ心の　わたしなの

あなた思へば
このごろは
心臓の底が　疼いてよ

身も世もあらぬ
思ひして
惚れたわたしの　罪なのね

「切れてしまへ」の
謎ですわ
りんごの皮が　断れました

呼べばとて

返らぬ人を　呼べばとて
なげきは永久に　盡きぬゆえ
　酒場の酒に　醉ひ痴れて
　空しく踊る　わが姿

そむける人の　ありし日に
のぞみを繋ぐ　夜のゆめ
　歡び秘めし　束の間も

儚く消えて　風ばかり
命を賭けし　戀は失せ
泣けども盡きぬ　わが涙
　悲しく生ける　うつし身に
　酒場の唄の　やるせなき

卒業する日

春の日に
丘の櫻は輝けど
遠く別れる僕らだよ
　卒業する日が淋しいナ

學び舍の
柳は芽ぐむたそがれに
せめて爪彈くマンドリン

　卒業する日が淋しいナ

思ひ出は
盡きぬ繪卷の幾ページ
若き涙を流さうよ
　卒業する日が淋しいナ

高らかに
歌をうたへど酌む酒の
なぜか　今宵はほろ苦き
　卒業する日が淋しいナ

悲しき歌時計

嫁く人に
男の意地よ　泣けもせず
空しき戀の　歌時計

飲めばこて
酒場の酒の　ほろ苦く
胸の傷手は　増すばかり

憎しみを
忘れようこて　踊れども
眸にうかぶ　うしろ姿

あきらめの
心にそゝぐ　夜の雨
悲しく歌ふ　歌時計

秋の砂丘

砂丘往けば
さらさらと
濱ひるがほの花が咲く

渚に立てば
貝殻に
離れ〴〵の影ばかり

荒海　さわぐ
秋の海
遠く遙かに渡り鳥

別れし人は
歸り來ず
今年も秋となりました

子守唄

――櫻兒ちゃんを悼みて――

ころり　眠ぶたや
菜の花月夜
どこか　行燈の灯がついた

・

ころろ　ころろと
田螺の貝が
おぼろ月夜の田で鳴いた

・

天の川原の
七夕さまは
笹の葉つばに露を撒く

・

月のある夜は
雁々　渡れ
街の子どもは門に立つ

・

ちらり雪降る
日の昏れ方は
山でお猿も泣くぞいな

日かげの花

派手に咲いても　日かげに潤む
わたしや
浮世の淋しい花よ
　泣いてくれるは　渡り鳥

返り咲いても　時雨に濡れて
わたしや
散りゆく涙の花よ

　泣いてくれるは　渡り鳥

お化粧しながら　涙で暮らす
わたしや
買はれた　京人形よ
　泣いてくれるは　渡り鳥

あいつは獣

酒は妖しい
サタンの息吹
ボクは
唇盗まれちやつた

醉へば崩れる
ボク　緋牡丹か
赤い

吐息も盗まれちやつた

さんざ醉はせた
あいつは獣
弱い
女をどうしやうつてのよ

夢の銀座

戀のデパートに灯のつくころを
心いそ〳〵地下鐵出たが
逢へば恥かし　逢はねば悲し
銀座通りも
夢うつゝ

忘れられないあの夜の夢を
思ひ出させる銀座の柳

泣いて暮らすな　花賣娘
せめて買ひましよ
花束を

青いシグナル　ひゝゝき消えて
交叉点さへ氣まゝに越せぬ
銀座通りは　戀愛街道
泣いて別れる
人もある

水藻の花

吹く風に
流れて暮らす
わたしや　繊弱い水藻の花よ
けふも涯ない　旅の空

降る雨に
花片　濡らす
わたしや　涙の水藻の花よ

波にゆられて　日が暮れる

涯しなき
流れに咲けど
わたしや　うれしい水藻の花よ
夜はさゝやく　星かげこ

惜春譜

♪橋は八ッ橋　あやめの盛り
戀にゆかりの　むらさき色が
水に流れて　しよんがいな
ヱ、ヱ　しよんがいな

♪色も香に立つ　菖蒲の朝湯
頰にほんのり　うす紅染めて
粹に銜へた　妻楊子

ヱ、ヱ　妻楊子

♪雨の柳に　蛇の目もさゝず
粹な素足に　塗下駄履いて
あれさ　しつぽり　濡れ燕
ヱ、ヱ　濡れ燕

♪柳ァ髻よ　三ヶ月ァ櫛よ
三十島田の　見上げる頰に
散るは五月の　山ざくら
ヱ、ヱ　山ざくら

街の夜霧

流れゆく
夜露つめたし
酒場は遠し
青い柳は　影ばかり

流浪の
旅にやつれて
わしや　泣くばかり

招く灯かげも　霧の中

なつかしい
街は夜霧に
つゝまれて
鳴るは悲しい　辻時計

片戀

胸に
なやみが盡きぬなら
青い灯(ほ)かげで
ミリオンダラを
酌(く)んで
朗らに醉ふものさ
醉ふて

朗らになつたなら
赤い灯かげで
マンハツタンの
グラスを
高く揚(あ)げるのさ

高く
グラスを揚(あ)げながら
胸のなやみを
吹きこばし
バツカス
讃(たた)へて踊るのさ

母を憶ふ歌

ほの甘き
海ほゝづきを　鳴らしつゝ
母に抱れ　仰ぎ見し
天の川原よ
星かげよ
涙ぐまれし　双の瞳よ
しらじらと

アカシヤ花咲く　丘に立ち
母と聽きにし　耶蘇寺の
祈の鐘よ
讃美歌よ
母が秘めにし　十字架よ
聖かりし
おん母上の面影よ
われを愛でにし　たましひよ
幼きころの
思ひ出に
歌をうたひて　懐かしむ

北極の唄

こゝは北極　地球の涯よ
どちら向いても　氷山ばかり
かはいあの方　白熊狩りよ
丈は低いが　未來の酋長

トコ　オットセ　ヱスキモヨー

こゝは北極　地球の涯よ
海にや海豹の　尻振りダンス

戀の囁きア　オローラの下よ
熱い思ひで　氷が解ける

トコ　オットセ　ヱスキモヨー

こゝは北極　地球の涯よ
喰べてみたいは　バナナに南瓜
一目見たいは　カナカの娘
わたしや十五で　北極美人

トコ　オットセ　ヱスキモヨー

街の戀

青い柳に夕雨そゝぐ
雨は七いろ　虹の雨
濡れたペーブをそゞろに歩きや
いとし彼女に逢ひさうな

ワッサパイプを横ちよに咥へ
頬に小雨のこゝろよさ
逢ふ身なやまし　待つ夜の永さ

ジンジャエールが身に泌みる

廻るレコードに夏の夜ふけて
戀の黒猫　忍び泣き
逢へばなやまし　逢はねば辛し
銀座裏町　雨が降る

懐しの卒業日

かひ抱く
卒業證書に　ちら〳〵と
散るは彌生の　山ざくら
あゝ　懐しの卒業日

お別れの
記念にうつす　寫し繪の
清き瞳よ　黒髪よ

あゝ　懐しの卒業日

師の君の
涙にぬれし　み諭しを
心に刻む　今日の日よ
あゝ　懐しの卒業日

わが卒へし
母校の姿　見返れば
門邊に招く　糸やなぎ
あゝ　懐しの卒業日

銀のピッケル

仰ぐあの尾根　朝霧巻いて
アルピニストに　來いよと招く
こゝは上高地　鶯鳴いて
朝餉たのしい　キャンピング

槍や穂高は　岩壁ばかり
戀のザイルに　命をかけて
さあさ　登ろよ　登ろよ　登ろ

銀のピッケル　伊達ぢやない
匂ふ鈴蘭　衾に敷いて
お花畑で　晝寢をすれば
遠い瀬鳴りが　いつしか消えて
可愛い雷鳥が　枕もと

山で暮らせば　焚火が戀し
焚火圍んで　チョコレート喰べて
明日のコースを　語らひながら
いつかごろりと　高いびき

マドロス行進曲

吼えろ嵐　逆巻け怒濤
ぼくらは若いマドロスだ
嵐を衝いて
嵐を衝いて　進むよ
遙か
緑の港を　目指して
裂けよ白帆　倒れよマスト

ぼくらは若いマドロスだ
力のかぎり
力のかぎり　進むよ
遙か
緑の港を　目指して
來れ氷山　ふぶけよ吹雪
ぼくらは若いマドロスだ
羅針を信じ
羅針を信じて　進むよ
遙か
緑の港を　目指して

戀のジャンプ臺

スキー滑るなら
處女雪踏んで
空の涯まで　身を躍らせよ
　若いスキーヤーは
　お山の花だ
　戀のジャンプ臺　風切つて飛べよ

なさけ濃かに

粉ナ雪降つて
遠く遙かの　ヒユツテも埋れ
　若いスキーヤーは
　お山の鳥だ
　白樺の林も　風切つて飛べよ

スキー眼鏡が
吹雪に曇りや
どこが西やら　さて東やら
　若いスキーヤーは
　お山の羚羊だ
　深い溪間も　風切つて飛べよ

滑り疲れて
左様なら告げて
西の山見りや　入日が赤い
若いスキーヤーは
お山が母よ
心惹かれて　麓へ滑る

星のあかりに

星のあかりに　濡れて咲く
夏の夜あけの　朝顔は
うすくれなゐの　花びらに
淡きいのちの　戀を知る

夕べの月に　咲いたとて
宵待草の　よろこびは
今宵一夜の　うすなさけ
あすは悲しい　泣き別れ

昭和十年一月卅一日印刷
昭和十年二月五日發行

定價金六拾錢

限定200部の内

著者檢印

著作者　富山市八人町一九　山岸曙光

發行者　富山市安野屋町二七〇　詩と民謡社　代表　中山輝

印刷者　富山市鹽商繪八九（本局裏）　八尾一三郎　電話呼四七七一番

發行所　富山市安野屋町二七〇　詩と民謡社

終